

国語 第1学年 をへをつかおう 検討会の想定問答

指摘 1：この単元の中心となる学びは何か。

返し：本単元の中心は、助詞のをとへの表記である。をとへの短文カードを用いて、選んだ言葉と理由を確認する。参照した指導事項と評価規準の対応は、単元の評価欄に示した。

指摘 2：本時の発問は何を考えさせるのか。

返し：発問は「何をしたかどこへ行くかをどう書き分けるか」である。行き先を書くときはへを使ったという反応を予想するが、同じ答えを言わせることが目的ではない。選択や解釈の理由を言葉にさせる。

指摘 3：どんな誤解を予想し、どう手当てするか。

返し：予想する難しさは、音だけを頼りにおとえを書くことである。動作の対象と行き先を絵で示して助詞を選ぶ。援助後にも同じ課題に戻り、自分で判断できた点を確認する。

指摘 4：何を記録に残せば評価できるか。

返し：初稿・見直した稿・修正理由を評価資料にする。行動や行き先を表す文を書き、をとへを使った箇所を読み直しているかを、目標と同じ観点で判断する。提出したかだけでは判定しない。

指摘 5：意見が異なる場合は、どちらを正解にするか。

返し：表記や辞書の意味は確かな見本に戻る。解釈や表現は根拠と目的に照らして検討する。友達と異なる答えでも、その理由を説明できる場合は並べて扱う。

指摘 6：活動に参加しにくい児童への配慮はどうするか。

返し：教材の拡大や教師の読み上げを用意し、口頭、指さし、短い記述などで考えを表せるようにする。学習指導要領の第3の1(9)に従う。援助を受けたこと自体を評価を下げる理由にしない。

指摘 7：主体的に学習に取り組む態度は本時だけで決めるか。

返し：学年の目標(3)に従い、試行と見直しの記録を単元中に集める。発言数や教師への従順さだけでは判断しない。

指摘 8：時数と活動の配当は何を根拠にしたか。

返し：総時数は東京書籍公式単元一覧に記載された2時間である。各時の活動配分と本時の位置は本案の提案である。学級の実態に合わせて調整する。

指摘 9：端末がなくても実施できるか。

返し：学習の記録は紙で作れる。端末は拡大表示や修正前後の比較など必要な用途に絞る。操作の巧拙は国語の評価に含めない。

AIが作成した授業案です。授業での検証は未実施です。自校の教材・年間計画・学級の実態に合わせて確認してください。



Threads「三重でAI使うなら」(@mie_ai_katsuyo)
https://www.threads.com/@mie_ai_katsuyo

LINEオープンチャット
みえ先生ラボ

